

中世の女性観

―フィリップ・ド・ノヴァルの『人生の四段階』について―

前 野 みち子

人の一生をいくつかの段階に分け、各々の段階について解説する人生論の系譜は、遡ってみれば非常に古い。それらの起源は古代ギリシアにあり、医学や自然科学の見地から説かれた。とくに四段階区分は、中世の自然科学者ロジャー・ベイコンによればガレノス医学のよく知られた温冷乾湿の人体性質論から導き出されているとされる⁽¹⁾が、中世においてそれが広く説得力をもったのは、おそらく春夏秋冬の自然循環サイクルが人の一生になぞらえられた結果だったろう。中世がキリスト教化に取り込んだ異教的豊穡儀礼やカーニヴァルにおいても、冬から春への季節の転換は古い植物の死と再生として意識され、老人の姿をした冬の王が火に投じられ追ひ払われて初めて、新しい春が誕生すると考えられていた。

このような時代に、自然学や医学、あるいは占星術（これも近

世までは学問であった）などの学問領域からではなく、もっぱら世俗的な見地から四段階の人生モラルを記した書物がある。それがフィリップ・ド・ノヴァルの『人生の四段階』⁽²⁾（一二二六〇年頃）である。人すべての人生を男性によって代表表象するのを常としたこの時代に、各段階の女性の人生にも言及している点で、当時の女性観を窺い知るための極めて貴重な資料と言える。恋を語る物語や詩には欠くことのできない女性、そして笑話や小話においてはしばしばネガティヴでたくましい存在感を示す女性が、文学のジャンルを超え出ると途端に影のように実体を失い、世俗的記述の対象から外されてしまいがちなのが、中世という時代だった。聖女に関する記述は数多くあるが、世俗的日常に生きていたはずの女性の姿は、崇拜するにせよこき下ろすにせよ、文学という特殊なバイアスにゆがめられて生き残ったもの以外にはほとんど存

在しない。しかし、それは果たしてどのような質のゆがみだったのだろうか。

世俗の女性の識字率が極めて低かった時代には、女性に関する言説はもっぱら男性の手になるものであり、それが文学であつてもなくとも、そこには男性が女性に向ける視線、男性の女性観が投影されていることに変わりはない。この点を常に念頭に置いた上で、ここでノヴァルの女性観をテキストに即して検討しようとするのは、程度の差はあれ日常の異化を試みる文学という形式、すなわち文学的バイアスと、日常性に根ざしたモラルを説く記述の間の懸隔を、この作業によって推し量ってみたいからである。

ノヴァルの残した同時代の女性に関する記述の重要性は、まさしく同時代に成立し、同様に世俗の見地から人生の四段階について解説している同じくフランス語の書物と比較してみれば、なお一層明らかになる。それはアルドブランダン・ド・シエナというイタリア人医師が残した『身体の管理』（一二五六年頃）⁽³⁾で、世俗的といっても養生法に主眼をおいているから、ここでの人生段階論はあくまで副次的なものである。とはいえ、この書で多くに女性について言及されるのは、男性の性的対象として（「女との同衾について」および子供（＝正嫡）を産む性として（「妊娠中の女はいかに養生すべきか」）の二つの場合、つまり女性が男性の人生にとって自然再生産の上で必要欠くべからざる存在とな

る二つの場合に限られ、人生の四段階を論じる際にもこの医師の念頭にあるのはもっぱら男性の人生だけである。⁽⁴⁾

『人生の四段階』の著者ノヴァルは十二世紀末に生まれ、かなり早い時期に故郷のロンバルディア（ノヴァラ）⁽⁵⁾を去ってオリエントに赴き、軍人としての経歴を開始する。その後、十字軍運動によって成立したフランス系のキプロス王国宮廷に仕え、後に神聖ローマ皇帝フリードリッヒ二世との戦い（一二一八年のダミエットの攻防）に参加して武功を挙げた。その後は外交官としてローマ法王やフランス王の周辺で活躍している。キプロス史や叙事詩、恋愛詩⁽⁶⁾などの作者として知られるノヴァルは、法律関係の著作によってもフランスの歴代著名法律家の一人に数えられており、ここで取り上げる晩年の著作『人生の四段階』には、このようにさまざまな体験を経た彼のモラリストとしての面目が躍如としている。中世盛期ヨーロッパ貴族の典型的な人生を生きた彼は、「自分の一族、および自分の教えを聞き記憶にとどめたいと願う他の人々に教えるために」⁽⁷⁾、さまざまな体験をもとにこの書を記したと述べている。ノヴァル自身は貴族（騎士）階級に属しているが、彼が当時の都市に生活する各階層の人々に幅広く目配りしていること、十五世紀にはこの書がイタリアでも知られていたらしく⁽⁸⁾かなり広い地域での流布が推測されるこ

と、また彼の語る人生の諸段階のイメージが十六世紀後半まで大陸ヨーロッパの図像に繰り返し現れるものとはつきり連続性を示していることなどを考えあわせるならば、女性の人生についての記述を含む数少ない文献であるという理由からのみならず、少し詳しく考察しておく意味があるだろう。執筆当時すでに七十歳を越えた老齢に達していたためか繰り返しの多い教訓話や人生智には、それでも単なる図像からは窺い知れない中世都市社会の細部が透かし見えて興味深い。

著者が結論部で総括的に説くところによれば、人生の四段階はそれぞれおよそ二十年の長さで考えられており、各段階はまた大きく二つの部分に分けられる。それぞれの段階の後半部は次の段階に向かう移行期であり、それを用意する時期と見なすことができる。ここでは、各段階で男性の人生モラルが語られた後に女性のモラルが続いているが、当時の社会で女性が置かれていた位置を把握するためには、男女それぞれに向けられたモラルを比較する必要があるので、前者についてもかなり詳しく分析するつもりである。

第一章から第四章までは順を追って人生の四段階の過ごし方が詳述される。⁹⁾ 第一の段階においては、神の教えにしたがって善悪の判断を植え付けることが重要とされる。「子供が育つにつれて、養育する者の愛情もますます大きく強くなる」ものだが、

「神は何事にも理性と節度を命じておられる」のだから、子供の意向を尊重しすぎてはならない。「というのも」と、宮廷にも仕えたこの中世騎

士は、『薔薇物語』と同時代の人らしく巧みなアレゴリーを用いて続ける。「意向は決して理性(と馬)に跨ろう¹⁰⁾とはしないものだから。従って、理性が貴婦人で、意向はその足下に控えているべきなのである。」(I・7)(括弧内は筆者)ノヴァルはそのために、〈若枝は細くしなやかなうちにたわめなければならぬ〉という諺をあげて体罰の必要性を説く。甘やかされて思い上がった子供は将来刃傷沙汰で殺されたり、あるいは逆に人を殺めて絞首刑になるかもしれない。この警告は、町はずれや市壁の外に常に絞首台が設けられていた風景に生き、街中の広場で見せしめの処刑が行われることも多かった時代の親たちに、生々



しい現実性^{リアリティ}をもって受け止められただろう。中世ヨーロッパ都市に日常茶飯に生じた刃傷沙汰としばしばそれに端を発する際限のない私闘^{フューデ}は、名門が細民を巻き込んで都市を党派心の渦巻く内乱の舞台と化した。この傾向は早くから都市が発達していた南ヨーロッパのほうがより一層強かつたろう。この文脈で著者は、青年期を論じる第二章でも、両親や養育者、教師に血氣盛んな若者たちの暴発行動の危険さを説き、名門や富裕層にはとりわけ家門全体の痛手となる不幸を未然に防ぐいくつかの具体策を提案している。失うものがないゆえに驚くほど大胆になりうる細民層の若者たちと比べて、徒党を組みそのリーダーとなって暴力沙汰に走る名門富裕層の若者が一族にもたらす災禍は計り知れない。だからこそ早いうちから意^{ヴォロンテ}向の制御を学ばせ、悪い芽をつみ取っておかなければならないと彼は言うのである。

著者はさらに中年期をあつかう第三章でも、今度は逆の立場からこれら危険な若者たちに触れている。中年期にいたって分別をわきまえた人間に期待されるのは、血氣盛んな若者たちに軽率な行動を戒め適切な忠告を与えるる賢者としての役割である。この役割は老年期について述べる第四章でも、「もし可能ならば」という条件付きで要請されており、第五章から第七章までの総括においても、若者たちの暴発を憂える言説が繰り返される。今日の社会史研究が裁判資料などから明らかにしているように、この

時代の良き市民たちにとって、彼らの引き起こす暴力沙汰が都市社会全体の憂慮すべき社会問題と考えられていたことを窺わせる。

老年期に入ってもつばら信仰生活に生きていたらしいノヴァルは、宗教教育を子供時代に学ぶべき第一の課題とし、祈りの基本についていくつか具体的な指示を出している（I・12～13）。その上でまず、将来めざすべき職業にそって基礎教育が施されなければならぬ。「子供のうちからなるべく早く準備したほうがよい職業のうちで、神にあつても地上においても氣高く名誉ある職業は二つある。それはすなわち聖職と騎士である。」^[1] この二つの職業は最も価値があるばかりでなく実質の実入りも多いというのが、彼の現実的な推奨理由である。聖職は、貧しい男の息子でも高位聖職者になることができ、それによって富を得て一族縁者の繁栄が期待できるという点で優れている。中世の封建制がまだ機能していた時代らしく、騎士もまた立派な功績を挙げれば富を得て大貴族にもなれるという。彼はここで生得の高い身分に安住した人としてではなく、一代の人生でさまざまの体験をし見聞を広めた人として、自身の能力と行為によって成功を収めた人として語っている。

このようにノヴァルは、子供は幼いうちから鞭で厳しくしつけ、宗教心を植え付け、よき教師をつけて早期に職業教育を始めるべ

きだと主張している。また富裕層の子供には将来の職業を考えて宮廷風の作法や話し方などがしつかり教え込まなければならぬ。第一章の男の子に関する教訓の最後の節で、著者はもう一度子供を褒めすぎたり可愛がりすぎたりするなどを念を押してから、それにもかかわらずこう続けている。「子供はよく遊ばせるべきである。なぜなら自然がそれを要求しているのだから。しかし遊び過ぎてはいけない。(すべてし過ぎ (tuit trop)) は良くないから」⁽¹²⁾。子供には子供時代の自然の欲求があることを彼は認めている。人生の諸段階を描く図像の分野でも、子供は中世からずっとガラガラ、輪回し、ボール、コマ、棒馬^{むしホース}などを手に子供らしい遊びに興じていた。この時代の子供は近代と比べると確かに早くから大人になることを目ざして(職業)教育を施されているが、だからといってアリエスが主張するほど子供としての猶予期間を認められていなかったわけではない。

因みにこの関連で、先に触れた同時代のアルドブランダンによる子供時代についての言説を検討しておこう。『身体の管理』には「生まれたばかりの子供をいかに育てるべきか」と題して乳児の世話の仕方についてかなり詳しく述べた節があり、彼が医者として子供の養育に並々ならぬ関心を持っていたことを窺わせる。実は先に触れた妊娠中の女性に関する記述はこの前節に当たっており、そこでは果実が熟して自然に地に落ちる比喻を用いて、胎

内に宿った子供が分娩されるまでの養生を扱っている。しかし彼の関心は初めから妊婦よりも生まれてくる子供のほうにあったらしく、この節には乳児の体質についての医学的説明、入浴とケア、眠らせ方、授乳⁽¹³⁾と食餌など、実に細々とした注意事項が記されている。そしてこの節のすぐ後に、「それぞれの年齢段階でいかに身体をケアするか」と題する彼の人生段階説が展開されるのである。

アルドブランダンはまず医者たちの一般論として「青春期、青年期、中年期、老年期」(左図⁽¹⁴⁾)という人生の四区分を紹介し、各段階を温冷乾湿説から説明する。しかし、彼はこの最初の段階をさらに細かく分ける必要を説き、子供は乳児期(歩き始める頃まで)、幼年期(七歳まで)、少年期(十四歳まで)の三段階を経てようやく青春期につながるとして、結局は六段階に区分する結果になっている。⁽¹⁵⁾そしてこの最初の段階についての彼の意見は、子供の意向^{ヴォロンテ}をなるべく押さえ込もうとするノヴァルと好対照をなしているのである。「七歳までの子供はすべて、よい習



慣を身につけるように、怒らせすぎたり遅くまで起きていたりしないように配慮しなければならない。欲しがるものは与えたほうがよく、子供がそれにいつまでも餓^{かつ}えていることがないようにすべきである。」この年代の子供はもの覚えも良く善悪の判断が付き始める頃なので、子供の本性^{ほんしん}（温冷乾湿の要素）がうまく攪拌され良き習慣で満たされるように心がけるのは周囲の人間のつとめである。従って、彼は子供への体罰にも反対する。次の少年期に達した子供は、保護者が望むならば学校へやり教師の手に委ねるのに適しているが、その教師は「叩くことなく教えることをきちんと知っている」べきであり、「子供の望む以上に学校にとどまらせたりせずに、教え、そして罰」することができなければならない。

以上のように、王侯貴族の侍医としてかなり狭い安定した世界に生きていたらしいアルドブランダン¹は、人間の自然的本性を全くニュートラルに捉え、それをいかに発展させ維持するかという点に関しても、無理せず末永くをモットーとする養生法の観点からすべてを生理学的に導き出している。彼の医学的知識が今日ではまったく通用しないものになっているにしても、自然を生かす発想そのものは今日にも通じる進歩的側面をもっている。これに対しノヴァルの与える教訓は、中世都市社会、とりわけ南ヨーロッパ的な¹⁶ 現実¹⁷に直面していた人のものであり、それだけに

この時代の人生観を窺い知る有力な手がかりとなる。さらに、彼はしばしば諷刺的な言い回しを引き、自身の主張をそれによって社会化あるいは一般化し、中庸のバランスを保って人すべての用に供しようとしている。モラリストに典型的なこのスタイルは、十七世紀までヨーロッパの世俗文学の重要な一ジャンルであり続けたが、それが十三世紀半ばという時代に俗語（フランス語）で残されていることは注目に値するだろう。

さてその一方で、子供時代をあつかう第一章では女の子についてもかなり多くの紙面が割かれている。¹⁸ 女兒を育てる人々はず、命令への服従、従順を子供のうちから厳しくしつけ、粗野でなげやりな話し方、醜い振る舞いをしないように教え込まなければならぬ。このような振る舞いがゆくゆくは墮落した人生につながるからである。また、娘は物惜しみしない性格であってはならず、楽しみをもつ必要もなく、貧しくなければならない。なぜなら物惜しみしない娘は結婚後、夫が同じ性格であれば財産をなくすだろうし、夫が吝嗇家であれば彼に恥をかかせるだろうから。娘には子供のうちから何か仕事を、とりわけ糸紡ぎや針仕事を教えなければならないが、それは娘がよく「聞き¹⁹（entendre）」、決して考え²⁰（penser）ない」ようにするためである。²¹ ここには、娘（女性一般）にもつばら聞き従うことのみを教え、その思考能

力を一切認めようとしないうち徹底した家父長的男性中心主義がある。そしてこの考え方は十六・七世紀になっても見出されるものなのである。

さらに著者は、娘の陥りやすい危険について次のように述べている。

とりわけ女子は、心においても、外見においても、行為においても、(男子より)一層悪しきことを警戒しなければならぬ。というのは罪が小さくても非難は同じだからであり、娘とその一族が被る恥は息子よりもずっと大きいからである。娘はふしだらに通りをうろついてはならない。そんなことをすれば彼女は人に会い、人に見られ、容易に男に話しかけられたり話しかけたりすることになるだろう。だから、娘が男に近づくことは子供時代においても決して良いことではないし、大きくならないからはおさらである。なぜなら火と麻くずが出会えばすぐに燃え上がるものだから。そして娘がねだり屋で人のものを欲しがるなら、彼女は自分の心をねだられ欲しがられることになるだろう。欲しいという気持ちがいざいざ悪い女と悪い男を作り出すのである。(I・22)

子供を小さいうちから厳しく監視・監督しなければならないと

いう点で、ノヴァルの教えは男女を問わず一致している。しかしここで注目には値するのは、娘の親あるいは養育者への警告がごく幼いころから常に恋愛沙汰との関連で説かれていることである。

娘には尼僧になるのでないかぎり文字や書くことを教えるべきではない。なぜなら娘の読み書きから多くの禍が生じるからである。娘たちは手紙を与えたり遣ったりし、自分にも寄せさせる。それらの手紙ときたら、狂気と懇願に満ち、シャンソンあり詩あり小話ありで、とても口には出せず、伝言してくれと頼むこともできないようなものである。そして、娘が悪事をはたらく能力などまったく無くても、悪魔はしたたかで罪を犯させたがっているので、手紙をもらえば読んで返事を書く気を起こさせる。その返事が愚かしくても巧みであっても同じこと、返事を出せば敵にそのかされ、女の性質の弱さと前よりもっとお世辞たらたらの手紙によって恋愛沙汰に引き込まれ、罪を犯すことになるだろう。よく言うように、蛇には毒を与えられない、もう十分毒をもっているのだから。(I・25)

若い頃には恋愛詩も書いたことを苦々しく告白している著者は、当然、宮廷風の貴婦人崇拜の定式に則って「お世辞たらたらの」恋愛文を書いた覚えもあるに違いない。彼は、人がしばしば

口では言えないことを書き、そのように書かれたものがたとえ自身心の真実ではなくとも、巧妙であれば相手の心を動かすことができるという恋文の効果をよく知っている。分別のない娘にとって、読むことと書くことはともに恋心を植え付け増大させる危険な道具である。だから、老年期にいたった彼はいまや必死に娘を守る側に回り、キリスト教中世の共有する〈女の弱さ〉の固定観念をふりまわすのである。

女性の読み書き能力が性的逸脱の引き金になるのではないかという危惧は、十三・四世紀の他の文人にも見られるが、⁽¹⁸⁾ ルネサンス期イタリアにおいてもモラリストや人文主義者によつて同様の意見が盛んに語られ、一般市民の女子教育に実際ある程度まで歯止めをかけていた。⁽¹⁹⁾ 十六世紀に至つても南ヨーロッパではまだこの傾向が強く、娘に識字教育を施すべきではない理由として、恋文が仲介する秘密結婚の危険や人妻の姦淫事件などが引き合いに出されている。また娘の識字教育を許容する場合でも、恋愛を扱った書物は入念に遠ざけるよう口を極めて警戒が促されるのが常だった。⁽²⁰⁾ このような危惧がどれほど現実的なものであったかを確かめる術はないが、知識ある女性と姦淫を結びつける言説が広く行われていた一つの背景には、まさしくノヴァルに典型的な恋愛とラブレターを直結する観念連合が存在しただろう。恋文の模範とされたオヴィディウスの『名婦の書簡』は、『恋

の技法』などとともに中世を通じて修道院(尼僧院を含む)で脈々と生き残り、ラテン語学校でも広く教材として使われていた。⁽²¹⁾ 風俗紊乱のかどでローマから追放された詩人のこれらの書物に、中世の僧院ではもっぱらキリスト教的な解釈がほどこされた。それを読む尼僧がたとえ詩人の意図を正しく理解したとしても、彼女たちの行動範囲が僧院に限られているなら、さほど大きな問題とはなりえなかっただろう。しかし、ひたすら従順で純潔な娘を育て、より良い結婚に導くことだけを願う保護者にとつて、彼ら自身にラテン語学校で学んだ経験があればなお一層のこと、恋の情念を切々と訴える女性の手紙の存在は、たとえ作り物であったとしても、かなりの脅威と感じられたに違いない。中世の若者たちがこの作品をマニュアルとして女心を学び、俗語(自国語)の恋文執筆の腕をみがいたとすれば、それを受け取る娘の目に一丁字もないことは、たしかに唯一無二の救いになり得た。結婚が恋愛とまったく関係のない家系維持と嫡子相続のための社会契約と考えられていた世界では、恋文から結婚にたどりつくという発想がそもそも存在しなかった。世俗文学の分野でも、十四世紀半ばのボッカッチョの『デカメロン』から十六世紀ドイツのハンス・ザックスの笑話に至るまで、ラブレターは結婚外の恋愛や色事の道具であり続けている。しかし、考え得るあらゆる危険の芽をすでに子供の頃から摘んでおくために識字教育そのものを拒絶する

極端な態度は、都市の経済的發展とともに都市文化が洗練されはじめる十五世紀後半になると、少しずつ崩れていったようにみえる。

さて、ノヴァルは先に引用したような内容にそって、保護者に「娘が正しく養育され良き振舞いを身につける」(28)ように説いて止まない。また、娘たちはみな「進んでそれを学び身につけるべきである。なぜなら多くの貧しい娘が良き評判によって貴婦人になるにふさわしいと見なされ、高い身分の人選ばれて結婚したのだから」(29)逆に、身分の高い貴婦人であっても、悪い評判によって名誉と結婚を逃してしまうと彼は警告する。娘の価値はすべてよい結婚との関連で判断されている。このような女性観は基本的に中世的な女性嫌悪の伝統にあり、この書でも繰り返し女の弱さ、愚かしさが強調される。しかし、彼の貴族的出自を反映してか、同時代の笑話^{フリップ・オイ}に脈々と生きている女性像の典型、野放図かつ大胆、そしてあくまで矯正不可能な女のイメージはここでは影が薄い。それはもっぱら「悪い女」の見本として、「良い女」を作り出すことをめざす彼の記述の周辺に現れるだけである。たとえば、女の本性悪に対するあきらめを一種突き放した調子で嘆くいかにも中世的な言い回し、「女自身が自分を見張っていないかぎり女を見張ることなどできない」(29)に対しても、著者はそのような見張りそのものが「愚かしい人々」の「愚行」

だと一蹴している。娘(女)の保護者たる者は、単に「間断なく見張る」のではなく、常に予見をもって、つまり正しい養育によって、娘の悪の芽を早い時期につみ取っておかなければならない。「女たちはある意味で非常に有利である。というのも、彼女たちが唯一善良でありさえすれば、名誉を守るのはごく簡単なことだから」(31)いささかの皮肉も交えずに語られたこのような言葉の背後には、中世の門閥や富裕市民層の深窓に生まれ育った娘たちの窮屈で単調な日常が窺い知られる。

続いて青年期をあつかう第二段階は、冒頭で「男女の人生の四段階のなかで最も危険な時期」とされている。まず男性に関しては、すでに第一段階の子供時代にその芽をつんでおくように戒められていた種々の悪行が、この人生段階ではすぐさま現実のものとなりがちなこと、それが引き起こす結果の大きさを述べて、繰り返し自己抑制を促している。血気にはやる若者は一度何かを得たいと思いこむと手段を選ばずその目的を遂げようとする。この無謀さが数々の取り返しのつかない禍をもたらすのだという著者の訓戒は、第一段階のモチーフをほぼそのまま踏襲する形で展開される。先に触れたように、名誉に敏感で容易に激昂し、恥をそそぐためにすぐさま腕力に訴える若者たちの短絡的な行動とそれが引き起こす無限連鎖の私闘の世界^{フェード}、若い殿方を中心に徒党



を組み刃傷沙汰
や暴力を繰り返
す若者集団の存
在は、中世都市
史にしばしば暗
い影を落として
いる。ノヴァル
が大きな危惧を
もって改めるよ
うに警告する若

者たちの行動形態は、当時の社会の現実を彷彿とさせる。

青年期の喧嘩好きは訴訟好きにもつながっている。著者がとくに戒めているのは、「高位聖職者、自分が仕える主人、そして妻に対する」(44) 訴訟である。ノヴァルはこう断定する。一番目の高位聖職者に対しては全く勝ち目がない。というのも、人は生において死においても彼らの慈悲にすがらねばならず、訴訟を起こしても裁判官は当の聖職者自身で、君主に訴えようと「すべての道は聖職者につながっているのだから」(45) 次に自分の仕える主人に対する訴訟もかえって損害を被るだけであり、負けるが勝ちである(46)。そして最後に妻に対する訴訟、これも愚の骨頂といえる。「妻に対して訴訟を起こす者は、もし彼の方が

間違っているなら神に対して過ちを犯すことになり、結婚の慣習に対する忠実さを欠くことになる。」訴訟をきっかけに弱い(愚かな)妻はかえって悪行を犯す気になるかもしれない、悪い噂がますます事を大きくするかもしれない。そうなればすべての恥辱は結局夫自身に降りかかってくるのだと著者は言う。さらに夫婦の不仲についても、妻に対する根拠のない嫉妬がかえって他人に利用され不幸を大きくする危険を説いて戒めている。

しかし、青年期はいわば人生の夏であり、肉体も壮健で精を出して働くのに最も適した時期である。それゆえ若者はどんな仕事であれ全力を尽くして働き、財産を築き、老年の生活を自分とその子孫と使用人のために準備しなければならない。貧しい老人は、「若いときに(財産を)求めなかったために嫌われ、相手にされず、責められ、馬鹿にされる。」「長生きした多くの人々が、財産がなかったために惨めに死んだ」(75) などという呵責ない言葉からは、中世の老人たちが生きた酷薄な現実が彷彿とする。これに対し、一生懸命働くことは世俗的利益に結びつくばかりでなく、職務に集中することによって罪を犯す気も起こらず、その暇もなくなるので、魂にとっても利益が大きいのである。

さて、青年期は多くの男性にとって結婚生活に入り、あるいはすでに結婚生活を営んでいる時期でもあるので、この書の結婚に関する言説もほぼ第二章に集中している。それでは、中世の人生

経験豊かなモラリストにとって、結婚とはいったい何を意味していたのだろうか。ノヴァルは結婚を、一つには火のついた若者たちの性衝動を受け止める社会的な装置と考えていたように見える。先に触れた中世若者集団の刃傷沙汰や乱闘事件は、しばしば性的暴力を内包するものだった。彼はまず、中世において繰り返して戒められた〈七つの大罪〉の一つ、色リュクシュニール欲の罪についてこう述べている。

若い頃には色リュクシュニール欲の火が燃えさかっているとしても、純潔を保ちあるいは節制を守る者には、聖霊の恩寵が消えることはない。宗教において、あるいは世俗において罪を犯すのではないかと恐れる若者は、できるだけ早く結婚しなければならぬ。そうすれば申し分のない人間になるだろう。なぜなら、法にかかった結婚は正しく良きことであり、俗人の犯す肉体と魂の危険な罪は、姦淫、それにもまして姦通なのだから(77)。

ここにはもちろん、「(…)男は女に触れない方がよい。しかし、みだらな行いを避けるために、男はめいめい自分の妻を持ち、また、女はめいめい自分の夫を持ちなさい」(コリントⅠ、7)という新約聖書の結婚観が投影されている。しかし著者はここでもつばら青年期の若者たちに向かって説いており、娘たちや女た

ちのことは全く念頭にない。そしてこの先ではさらに、甘やかされ手のつけられなくなった「富裕市民の息子たち」に触れてこう述べている。彼らは「勝手気ままに暮らしているので、ごく容易に色リュクシュニール欲の罪を犯し、貧しい隣人たちに暴行や陵辱を加えたりする。」(83)²² 父親や友人は彼らに仕事を身につけさせ、義務を果たすように教えこまなければならない。そして「彼らができるだけ早く、仕事に従事している軍人や自由農民よりも若いうちに、結婚させなければならない。(…)結婚した妻がいるという事実が彼らの気持ちを宥めてくれるだろうから。」(84) このように、結婚は巷間の暴力を緩和する力としてその効果が期待されている。中世ヨーロッパ諸都市に、市民の娘たちや妻たちを守るための必要悪として公設の娼館が次々と開かれるようになるのは十四世紀になってからで²³、この著者の時代には都市社会が性的暴発を防ぐための対策を積極的に講じていた形跡はまだない。そして公娼館が数多く設けられた後にも、都市の若者たちの暴力が目に見えて鎮静化したわけではなかった。結婚を社会制度が用意しうる唯一有効な暴力抑止策、あるいは暴力的な若者の懐柔策と見なす言説は、十五世紀のモラリストにおいてもまだしばしば見られる。²⁴ ノヴァルが女性にひたすら服従と善良さのみを求める意図は、おそらくこの辺りにもあるのだろう。

とはいえ、結婚に幻滅はつきものである。たとえ現実の妻が期

待とかけ離れた存在であり、「婚姻関係が死闘 (mortuus bataille マ) だ」としても、結局のところノヴァルは結婚という社会制度を肯定し、それは「この世の最大の家産と喜びをもたらしてくれる」と言う。「それに、たとえそれによって余計に苦勞することがあっても、家産がその穴埋めをするだろう。もし結婚がなかったら世の中はうまくいかないし、すべての人が罪のうちに生きることになるだろう。」(78) また、人は結婚によって初めて家産を相続させる嫡子を得、自分とその家系の記憶を長くこの世に残すことができる。その上「もし神が良き妻と良き子らをお恵み下さるならば、」それは最大の富の一つであり、立派な子供は家産にも代え難いものではないか。

このように彼は行きつ戻りつの論法で、結婚に何らかの世俗的現実的メリットを見いだそうとする。それはしばしば「たとえ」や「もし」という仮定によって述べざるをえない人生の賭ではあるが、都市社会のシステムを維持するためにその成員が果たすべき義務でもある。歳をとってますます信仰生活に身を入れるようになったらしいこの著者は、それにもかかわらず、妻との婚姻関係が神の直接的関与と祝福を前提とする秘蹟^{サクラメント}であるとは述べていない。⁶⁵ 彼にとって結婚はまず第一に世俗的社会的関係(慣習)であり、それは他のもろもろの関係、もろもろの状況と同様に、一定の人為的努力がなされた後には諦めるしかないものである。

る。

それでは次に、青年期の女性に関する記述に注目してみよう。人生の第一段階をあつかう第一章では娘についてもかなりの紙面が割かれていたが、第二章(33節から94節まで)ではその割合が減って、86節から93節まで、この章全体の八分の一強を占めるに過ぎない。一つの段階をほぼ二十年とする著者の区分法によれば、女性の場合にはすでに第一段階の終わりに結婚している可能性が高く、そのことは第一章の娘に服従を教える節にすでに、「子供のおときは養育者に、結婚しているならばとりわけ夫に、主人に従うように従わなければならない」とあることから分かる。人生各段階の教訓を述べるといふ著者の意図からすれば、「唯一善良でありさえすれば名誉を守るのはごく簡単なこと」とされる女性に関しては、子供時代に徹底した教育が施されてしまえばもはや言うべきことがほとんどない、というのが実情だったろう。実際、女性に話が及ぶ冒頭の86節で真つ先に警告されているのは、またもや女性の弱さである。「若い女はこの時期(男より)ずっと大きい危険に曝されている。なぜなら、女は決して男のようなしっかりした見識とよき意思を持っていないからである。」このように不完全な女性を教育するのは、青年期にはまず夫であり、彼は能力の劣る妻が過ちを犯さないように「妻を愛し理性によって彼女に面目を施し」てやらなければならない。しかし愛情を示

しすぎて甘やかしてもいけない、という戒めは第一章で子供の教育について与えられたものと同じである。そして女たち自身も、肉の罪を犯さないようにより一層厳しく自分を見張るべきである。女に関しては肉の罪、すなわち色恋沙汰アウフテンチュールを避けることが戒めのすべてであり、女の場合にはこの罪が自分だけでなく一族全体に及ぶという点が男と大きく異なるところなのだ、とノヴァルは繰り返して説いている(89)。神は「女たちにしつかりした意思と見識を与えなかつたので、彼女たちは若い時代でも他の年齢段階でも、自分を見張り御していくことができない。」(傍点筆者)しかし「聖霊の恩寵はかくも大きいので、そのために純潔をまもる女も多く、肉欲を断ち操正しい女、誠実な結婚生活を送る女も少なくない。」(93)つまり、女性が何かしら堅固な姿勢を貫きうるとすれば、それは彼女自身の意思や理性的判断によるものではなく、ひたすら神の恩寵によるものである。

以上のように女性には精神的な成長や成熟がほとんど認められていないため、人生の残りの第三・第四段階にいたると女性に関する記述はますます少なくなり、第三段階の中年期をあつかう第三章(95節から165節まで)ではわずかに161節から164節までの4節に過ぎない。しかしこの中年期についても、まず中心的に論じられている男性の方から概観することしよう。

男性の人生の第三段階である中年期は、四つの段階のうちで最も充実した時期でなければならない。それは季節で言えば收穫の秋、すなわち成熟と完成の時期である。

中年期において人は知識に富み、抑制がきき、理性的で一貫性があり、主イエスの誠の信仰において堅固かつ着実でなければならない。また、自身とその一族、そして彼が信を置き誠実に治めまたは仕える人々についても、その肉体と魂の名誉および利益のために賢明かつ配慮にあふれていなければならない。人はまたできるかぎり富を蓄えておかなければならない。というのやがて老いに至るからである。適当な時期に何らかの仕方方で上に述べた諸事を身につけ、あるいは追求していなければ、神の特別の恩寵がないかぎり、ほぼ決してそれらを手にすることがないだろう。(95)



中年期の教訓はこの最初の節にほとんどすべて集約されている。この時期からの人生に色濃く影を落とし始めるのは信仰と悔悛の問題で、ノヴァルは繰り返してこの問題に立ち返り、死後の魂のためにイエス・キリストという大樹に拠つてよりよい地上の生を営むように説いている。蒔いた種を刈り取る人生の秋は、節制と自己制御を身につけた完成期であり、良き監督者・養育者として若い世代に模範を示す立場にある。従つて、この世における役割はまだ十分大きいが、地上的なものへの関心を次第に永遠の生への関心に移していくべき時期でもある。著者は死後の世界においてこの世の善悪に公正な報いがあり、悔悛しない人々には煉獄での長い苦しみが待っていることを力説する。しかしその一方で彼は、地上の生が矛盾に満ち、行為の善悪にかかわらず富んだ有力者と貧しい人々の間の差が埋めようのないものであることも知っている。有力者の側にある彼が対立を深める双方に向かつて説きうることは、ともに忍耐によつて無謀な争いを控え共同体の平和を維持することだけである。貧しい人々は絶望を戒められ、煉獄の苦しみを逃れるであろうという慰めによつて、この世の惨めな生に対するあきらめを強要される。中年期には惨めな老年を避けるために「できるかぎり富を蓄えておかねばならない」と何度も強調されているだけに、この忠告はいかにも空しく響く。

そして第三章の終わりに、中年期の女性に対する教訓が語られる。この時期の女性は小斎を守り、神を敬い、子供を養い育て、彼らのために家産を増やし、大きな出費を避けて身を質素に保ち、夫を助け、子供を結婚させ、力に応じて貧しい親類や友人を援助し、罪を捨て、改心すべきである(161)。これらわずか数行で語られる女性向けの教えは、おそらく古代ローマあたりから繰り返されてきたもの²⁸⁾の二番煎じで、とくに新しい要素は見あたらない。ところが彼のペンは次の節で急に活気づく。そこには中世的な(愚かな女)の典型が登場するからである。

それはこんな話である。愚かで罪深い女がいて、非常に美しかったので皆にちやほやされていた。ある男がぜひとも彼女を手に入れようと思い、柄と鞆に金や宝石をふんだんに散りばめたナイフを贈った。それは女の趣味に合わない、女は恋人よりもナイフのほうを愛して大切に箱に収め、長持ちにしまった。そしてそのナイフをしばしば取り出しては眺め、愁いに沈み、自分に近寄ってくる男たちに次々と同様のナイフを求めた。彼女を得ようとして皆が競つてより美しいナイフを贈ったので、長持ちはとうとういっぱいになった。やがて女は中年にさしかかり、容色も衰えはじめて、男たちは次第に遠ざかっていった。女はまだ自分が美しいと思ひ込んでいたので、誰もやって来なくなったときに激怒した。そしてお気に入りの一人に使いを遣り、来てくれないのではない

かと不安だったのでナイフを一つ贈り物にした。相手は一度は表敬に訪れたが二度と来なかった。同じように彼女は次々と別の男たちに一本また一本とナイフを贈り、とうとう老いが始まったとき、最も美しく高価なナイフでさえも与えてしまうことになった。(162, 163)

この話は当時よく知られていたものらしく、中年になっても悔い改めない女には「ナイフの罪をあがなう」(164)という言い回しがあったという。おそらくナイフには性的な隠喩も含まれているが、地上の美や財産の移ろいやすさとそれに執着して現実を認めようとしない女の愚かしさへの戒めは、後には虚飾ヴァニタスのテーマと重なり、寓意図像集エンブレムや女性の人生の諸段階を描く図像にしばしば現れる、着飾って鏡を手にした女の姿につながっている。この図像は十五世紀ごろから登場し、十六世紀に大流行したが、着飾る(身繕いする)女に砂時計を突きつける、あるいは砂時計を手に背後から忍び寄る死神が描き込まれることもよくあった。虚飾ヴァニタスが「死を想え」メント・モリの警告を発するのと同じ文脈で、鏡に見入る女の姿は〈死の舞踏〉図にもしばしば描かれている。⁸⁷⁾後世のこのような図像伝統からも窺えるように、ノヴァルが語る美しい浮かれ女の没落の顛末は、中世の女性たちに与えられた戒めの最も典型的なものであり、この時代の女性観を直接的に反映していると見ることができる。著者はこの物語の教訓として、中

年期は若い頃犯した過ちを悔い改める時期であり、誠実に自身の肉体と魂の名譽をまもり利益を心がけるべきこと、夫や子供があるならば彼らのために、そして友人や親族のためにもそうすべきことを説く。つまり、中年期の意味づけは基本的に男性の場合とそれほど違わないが、女性にとつての罪の内容が終始一貫していわゆる恋愛沙汰ラブ・デュールをめくっているという点で、両者は際違った相違をなしているのである。ノヴァルはこの時期の女性に向けたわずか4節の教えのなかで、家庭内の女性が果たすべき伝統的な義務についてはごく一通り触れるにとどめ、その大半をこの浮気な女の話とそこから引き出される教訓に費やしている。そしてこのような記述からは逆説的に、中世の男性にとつての女性存在の意味がよりリアルに推測されるのである。

続いて人生の最後の段階、老年期をあつかう第四章は166節から187節までと他の章に比べてかなり短く、死にゆくための準備が中心的に語られている。十四世紀あたりから写本で流布し、十五世紀末からは小冊子印刷物でも広く出回った往生アルス・モリエンデ術(「わたしは死にゆく」というラテン語タイトルで知られる)の先駆けをなすように、ここでは死を前にしての心得、地上の価値を否定すべきことが繰り返し説かれる。老人は死後の魂の救済のためにできるだけのことをして、神に感謝を示さなければならない。持つて



いるものを処分し、あるいは相続人や一族友人に、あるいは喜捨として、進んで分け与えるべきである。この関連では若い妾の処分についても言及され、当時の

富裕層の生活ぶりや社会慣習の一端をかいま見させて興味深い。そのような女をもつ者は、妻として受け取る気のある若い男に自分から進んで与えるか、あるいはそれが尻軽女なら通ってくる若い男に与えるがよい、と著者は言う。ここにはすでに十五世紀末から多くの図像資料に現れる〈不釣り合いな男女〉^{カッブル}のトボスが見えるが、さらに直接的に老人と若い女の結婚をもつてのほかと戒める一節(173)もある。²⁸ 老人は若い人々を真似ることなく年齢にふさわしい生き方をすべきであり、色^{リュクシユル}欲にとらわれた老人は思い上がった貧民や貪欲な金持ちと同様、「われらが主の最

も憎む三つの罪」を犯すことになる。「老人はすべてについて控え目でなければならず、決して思い上がったはいけない」(174)のである。

自身老年期にあるにもかかわらず、ノヴァルの言葉は老人に対して手厳しく容赦ない。彼は世間一般が老人に向けるまなざしをはっきりと意識している。というのも、すでに中年期で盛んに警告されていたように、財産のない老年は誰からも顧みられず惨めであるが、財産があつても、自身がすでに「墓穴の縁にいること」を忘れ、「誰も死を逃れることはできない」(230)という自覚を持たない者は世間の笑いものになるからである。貪欲と色欲にとらわれたこのような老人像は、古代のギリシア中間・新喜劇やローマ喜劇にしばしば登場する老人を彷彿とさせるが、それが単に滑稽文学の伝統としてではなく、中世都市社会の現実として冷静に記述されている点は注目し値する。²⁹

続く182節から185節までは老女に対する教訓が語られる。といっても、親類縁者にかぎらずできるだけ多くの人々に施しや善行を勧めている他は、中年期の女性に向けた家庭的教訓とはほぼ同じ内容を簡潔に述べているだけである。そしてまたやあのナイフの小話を引きながら、老いを認めずに男を自分のもとに引き止めておこうとする女の罪深さが戒められる。彼女たちが「持っていたナイフをすべて渡してしまったあとでは、必然的に自分の財

産を与えることになる。さもないと男が拒絶するから。そうして彼らは名誉を汚すのだ。なぜなら罪は女たちに止まることなく、男たちにとつても瑕疵となるからである。」(185) 実はこのような老女と若い男のカップルもまた、先に男性の老年期のところで触れた老人と若い女のカップルの逆転した相として、十五世紀末から広く出回った〈不釣り合いな男女^{カップル}〉の図像にしばしば描かれた。老年期においては男性のほうも色欲への戒めがかなり強調されているので、公平に見るならば、男性が人生の積極的な役割から退いたときに初めて、両性の色欲へのスタンスが等しいものになったと言ふべきだろう。これまでの三つの段階において、男性に比べてひどく不釣り合いな大きさで焦点を当てられてきた女性の色恋沙汰^{アウフエンチュール}は、老年期に至つてようやく男性の側からの一方的な警戒対象から外されたときに初めて、男性の色恋沙汰^{アウフエンチュール}と等置される罪と見なされることになる。

ところがノヴァルは、老年期の記述を終えるにあたつてもう一度中世的伝統に立ち返り、キリスト教モラルに根ざした女性嫌悪の姿勢をふたたび色濃く印象づけている。彼は次のように言う。「老いた男は女より堅固な意思をもち、名誉と恥についてより大きな分別をもっているのだから」、自分の歳を認めたがらない老女とは異なつて、「女のもとに通つたり一緒に棲んだりしないように自制しなければならない。(…)彼らがたとえそうしたい(性

関係をもちたい)と思つても、ほとんど、あるいは全く不可能だろう。しかし女たちときたら、前に述べたような呪われた理由から、この能力を決して失わないのである。」⁽⁸⁾ (括弧内および傍点筆者) (186)

このようにノヴァルの『人生の四段階』はそれぞれの段階で男女両性の人生に言及しているが、女性についてのコメントはかなり偏っており、ほとんど性的逸脱を防止する立場からの教訓に終始している。ときおり記述の周辺に、若い娘に悪事を教える女や悪意ある女、身持ちの悪い浮気な女、老人に囲われた女などが顔を出す、それはあくまで反面教師としてであり、彼女たちにも時機を逸しないうちに悔悛するようしばしば忠告されている。これら中世笑話や『デカメロン』の登場人物によく似た女たちの疑いようなない実在が、中世都市の現実をどれほど鮮やかに色づけていたのかは、残念ながらはつきりしない。いづれにしても、ノヴァル自身が認めるように、それがたとえ「神の恩寵」によるものであるにせよ、「純潔をまもる女も多く、肉欲を断ち操正しい女、誠実な結婚生活を送る女も少なくない」からである。そして、自身で記録を残すことがほとんどなかった当時の女性は、屋内でごくありふれた日常生活を送っているかぎり、男性の注目を集めそのペンに記述されることもほとんどなかったろう。彼女たちが話

題になるのは、そしておそらく笑話や小話のネタを提供するのは、何らかの点で常軌を逸した場合であり、それはすでに古代ギリシアのペリクレースの葬送演説にもあるとおり、何としても避けるべきことだった。「婦徳について私から言うべきことはただ一つ、これにすべてのすすめを託したい。女たるの本性に悖らぬことが最大のほまれ、褒貶いずれの噂をも男の口にされぬことを己の誇りとするがよい。」⁽³¹⁾ この簡潔な言葉は、中世にも変わらぬ女性の評価基準であり続けている。とはいえノヴァルの記述は、キリスト教中世の色彩を帯びた婦徳に対する危惧の数多くの具体相を提供しており、同時代から十六世紀初めあたりまで、このような女性観を共有し表明する文人たちは、確かに少なくなかったのである。

注

- (1) cf. Rojer Bacon, *De proprietatibus rerum*, (1263-65) / *Le Livre des propriétés des choses*. Une encyclopedie au XIVe siècle. Introduction, mise en français moderne et notes par Bernard Ribémont 1999
- (2) *Les quatre âges de l'homme*: traité moral de Philippe de Navarre, ed. Marcel de Fèvreille. 1888 (reprint 1968)
- (3) *Le Régime du Corps de Maître Aldebrandin de Sienna*. Texte Français du XIIIe Siècle. ed. Louis Landouzy et Roger Pépin (1911/1978)

- (4) もちろん、養生法を論じるに際しては、男女に共通して言えることが多い。従ってここでも、彼の言説に女性についてのコメントが少ないうことがそのまま女性の度外視を意味するとは言えない。彼の女性観はむしろ、それ以前の中世医学の伝統にそのまま従っている。北イタリアのシエナ出身であったらしいアルドブランダン（アルドブランディヌス）は、この書を彼が仕えたシヤンパーニ伯爵夫人の求めに応じて書いたとされるが、彼はまた聖王ルイ＝ルイ九世（一二一四～七〇年）の侍医の一人でもあった。この書は当時の医学書がほとんど常にそうであったように、それまで知られていた書物からの抜粋・編纂というべきもので、ヒポクラテスやガレノスの温冷乾湿説や四体液節に従った記述が多く、人生の諸段階の解説も基本的にはこれに負っている。また、とくにアラビア哲学・医学者アヴィセンナについての言及が多い。cf. *ibid.* Introduction

- (5) ノヴァルの著作はフランス語で書かれているが、彼の出身地は当時神聖ローマ帝国に属したロンバルディアのノヴァラである。(cf. Charles-Victor Langlois, *La vie en France au moyen âge, de la fin du XIIe au milieu du XIVe siècle d'après de moralistes du temps*, 1926/84, pp.205-207 / Gaston Paris, *Philippe de Novare: Romania*, XIX, pp.99-102) フランス語の見事なから推して、ガストン・パリスはノヴァルがかなり若い頃からフランス語圏で暮らしていたのではないかと述べている。同時代にはイタリア人がフランス語で書いた著作がいくつもあり、ノヴァルやここに挙げたアルドブランダンの著作の他にも、フィレンツェの文人政治家で政争のため一時期フランスで亡命生活を送ったプリュネット・ラティーニの代表作『宝典』（一二二六～六七七年ころ）(Li Livres dou Trésor) などがある。

- (6) ノヴァルは『人生の四段階』最終章(Ⅶ・233)の略歴で、若い頃詩やシャ
ンソンの創作にふけったことを振り返り、「愛と呼ばれるこの世の大き
な愚行の一つ」と苦々しげに語っている。
- (7) *ibid.* VII, 235
- (8) この書に唯一含まれている奇妙な挿話が、十六世紀前半のイタリア
人作家ストラパローレの物語集に引かれているが、それは前世紀のイ
タリア語写本から採られたという。*ibid.* PREFACE p.VII-VIII
- (9) 以下の各段階に付した四点の図像は、テキストが最もよく保存され
ている十三世紀の写本の挿絵である。*Elizabeth Sears, The Ages of Man,
medieval interpretations of the life cycle* 1986 から借用した。
- (10) ノヴァルはここで騎士にふさわしく *chevauchier* (騎士) という言葉を
比喩的に用いている。
- (11) 奇妙なことに、シーアズはノヴァルのこの書を取り上げて (*Elizabeth
Sears, ibid.* p.101)、「彼が男の子に関しては「神への信仰、商業 (trade)、
礼儀作法 (courtesy)」を教えよと述べている」という。『人生の四段階』
全体を通じて著者は商業については何も語っていない、この誤った紹介
はこの書の置かれた歴史的文脈と著者ノヴァルの人となりを著しく誤
解させる。というのも、自身十三世紀前半の騎士であったノヴァルは、
商業をまだかなり胡散臭い職業と見なしていたはずだからである。中
世キリスト教は商業を高利貸しにつながる職業と見なしており、イエ
スが神殿で店を広げる商人を追ひ払う図は、中世宗教画においてとく
に好まれた画題だった。ル・ゴフの『煉獄の誕生』や『中世の高利貸
し』によれば、十二世紀末になって、キリスト教会はキリスト教徒に
本来禁じていた商業(高利貸し)を、遠隔地貿易によって発展しはじ
めた都市の経済状況とそこから教会に入る莫大な収入ゆえに次第に認

- めざるを得なくなった。この現実に対処するために教会はそれ以前の
教義にはまったく存在しなかった(煉獄)なる場所を天国と地獄の間
に造り出し、汚れた行為に携わった人々(とくに商人=高利貸し)の
魂を死後にそこへ導いて、長い時間浄化に努めさせることにした。(煉
獄)は十三世紀半ばごろまでにキリスト教徒の心に定着し、地上の罪
の多寡に応じて滞在する期間が決まる天国への行程になっていったと
いう。まさにこの時代に書かれたノヴァルの『人生の四段階』にも、(煉
獄) (*purgatoire*) という語は四度ほど出てくる(Ⅱ 54、Ⅲ 126、145、Ⅵ 216)。
最初の二つはこの世で悔悛しないならば煉獄で重く長く苦しむことにな
るといふ警告、次に貧乏人は煉獄にいる時間が短くてすむことを考
えて心を慰めるべきこと、最後は死後煉獄にある魂のためにレクイエ
ムを歌う聖職者にはたつぷりと支払うべきこと、とある。(煉獄)とい
う観念がすっかり定着していることを窺わせる用例であるが、商業(商
人)はほとんど彼の念頭になかったろう。因みに、百年戦争の頃(十
四世紀半ば)のフランス国王旗の旗手を務めたジョフロワ・ド・シャ
ルニも、男性の就くべき職業として相変わらず聖職と騎士の二つの職
業を奨めている。*Langlois, La vie en France au moyen age* p.212
- (12) 「し過ぎ」を戒める諺は中世に数多くあり、諺という本来的に人すべ
てへのメッセージのなかでも典型的なものと言える。その良い例はフ
ランソワ・ヴィヨンの「諺のパラッド」(後世の命名)で、冒頭から「し
過ぎ」がたたって悪い結果をもたらすことを意味する諺がいくつも連
鎖をなして並べられ、「水瓶は毀れるまでの井戸がよい」という近現代
まで流布した諺もこの文脈で引かれている。
- (13) 本来母乳が望ましいが、「母親が毎日子供に授乳することは不可能な
ので」、乳母を雇う場合の細かい基準が述べられている。*Le Régime du*

Corps p.76-77

- (14) 図像はこの書の十三世紀末の写本に付された挿絵で、この写本を底本にした前掲書 *Le Régime du Corps* から取った。
- (15) この六段階区分は、セヴィーリヤ司教のイシドルス（五六〇?～六三六年）や先に挙げたベイコンと共通している。
- (16) 彼の描き出す都市風景、とくに門閥間の私闘に関しては中世ヨーロッパにかなりの程度まで共通しているが、党派抗争は都市化が進んでいたことも絡んで、やはり南の方が早くから激烈だったように見える。また、聖職を騎士と並ぶ出世コースと見なし、貧乏人からの出世も可能とする考え方も、北方に全く見られないわけではないが、フランス以南のヨーロッパ的な色彩が強く認められる。それにしても、フランスにおける聖職と騎士（軍人）の二者択一が、スタンダールの『赤と黒』にまでつながる発想であることは興味深い。
- (17) 第一章の子供時代については、男子向けに20節、女子向けに11節のコメントがあるが、男子向けの節のうち初めのいくつかの節は性差に関係ないことが述べられているから、女子向けの節は実質的に全体量の三分の一を大きく越えている。
- (18) cf. Langlois, *La vie en France au moyen age* pp.214-215 たとえば『優雅なみやこ人』の著者や、ダンテの友人であった文人フランチェスコ・ダ・バルベリーノなどの例が挙がっている。
- (19) Paul F. Grendler, *Schooling in Renaissance Italy: Literacy and Learning 1300-1600*, 1989 pp. 87-89, 93-102 / Sharon T. Strocchia, *Learning the Virtues: Women's Education in Early Modern Europe*, A History, 1500-1800, ed. Barbara J. Whitehead 1999, p. 3-46 イタリアでは十五世紀になると、上・中産層の娘たちが家庭教師についたり、あるいは尼僧の開く小規模の学校や寄宿学校に通い始め、十六世紀前後には商業ネットワークの拡大と通信の必要性、印刷術の普及などに影響されて、それが次第に加速している。彼女たちの教育は初期には書くことを危険視する両親の意向に従って、表向きには読むことの方に主眼が置かれたが、その実書くことにもかなりの力が注がれていたようである。ヨーロッパの他の地域でも、十五世紀半ばごろから都市に開かれ始めた俗語教育の学校に、少しずつ女子が通い始めている。しかしいずれにしても、女子の受ける教育は初歩的なものであり続けた。
- (20) Howard Adelman, *The Literacy of Jewish Women in Early Modern Italy: ibid.* p.140
- (21) Ralph J. Hexter, *Ovid and medieval schooling: studies in medieval school commentaries on Ovid's Ars amatoria, Epistulae ex Ponto, and Epistulae heroidum* 1986 p. 137-140 十六世紀イタリアのラテン語教師は、『名婦の書簡』を文体と道徳的訓戒を教える教材と見ていたようである。cf. Grendler, p.255
- (22) このテキストは続けて、騎士がいる都市よりもない都市のほうがこのような暴力事件が多いと述べ、騎士が都市の治安維持に果たす役割を印象づけている。騎士階級出身のノヴァル自身の矜持を窺わせる。
- (23) この理由付けがどこまで真実だったのかは分らない。なぜなら、この施設は高収入をもたらしたので、都市だけではなく司教座が経営する場合もあったからである。ただし、イギリスでは公娼館が開設された記録がない。
- (24) 例えば、著名なルネサンス人、レオン・バッティスタ・アルベルティ（一四〇四～七二年）の『家族の書』にも、同様の言説がある。
- (25) 中世キリスト教会が結婚を秘蹟と見なすようになるのは、地域によつ

でも異なるが十一―三世紀のことであり、この著作の少し後の公会議で初めて結婚が七つの秘蹟の一つに数え入れられている。しかし、この教会の側の意識と人々の結婚観の間にはまだ大きな差があった。

(26) もちろん古代ローマの宗教は多神教で、婦徳が称揚された共和制の時代には**寵の神**(*グレスサ*の神(家の神))に対する信仰が強かった。

(27) 後述するように、この女性像は十五世紀前半にドイツで制作された〈死の舞踏〉図像で定着する。北イタリアのクリュゾーネにある〈死の舞踏〉壁画(一四八五―九〇年ごろ)にも、死者に導かれた行列のなかに、鏡に見入っている若い貴婦人の姿が描かれているが、これはドイツからの影響かもしれない。

(28) プリューゲルの絵画『ネーデルランドの諺』(一五五九年制作)中央に描かれている〈青いマント〉の諺はまさしくこのテーマをあつかっており、二本の杖にすがった老人が若く魅力的な妻によって青いマント(偽善の象徴)を着せかけられ、少し離れたところに彼女の恋人らしい貴公子が見える。

(29) この著作が成立した十三世紀半ばには、古典ローマ喜劇はごくわずかしが知られていず、ギリシア語はほとんど忘れられていた。中世のプラウトゥス喜劇については、中世笑話風に改竄されたラテン語翻案が何編か知られている。cf. *Latetische Comediae des 12. Jahrhunderts* 1979

(30) 女性の性的能力が男性よりずっと大きいという言説は、古くはギリシア神話に登場するテーパーの予言者テイレシアースの話にも窺える。彼は神によって女に変えられた体験に基いて、女は男の十倍も性的能力があると語っている。また、西暦紀元前後、何世紀かにわたって流行したギリシア小説のジャンルでも、『ミレシア物語』と呼ばれる小話

集には偽善的な女性の性欲の強さを笑う話があり、この話は女性嫌悪的伝統のなかでヨーロッパ中世を通じて知られていた。しかし、中世のこの種の言説にはほとんど常にアダムを誘惑したイヴの罪深さのイメージが結びついており、単なる蔑視的笑い話ではなくなっている。そこにはキリスト教モラルに対する違犯者＝悪魔のイメージがまとうりつき、女性の自然本性への猜疑心がより強まっているのである。この傾向は十六世紀においても持続し、例えばこの世紀末のハムレットの母親に対する非難にも典型的に現れている。

(31) トゥーキユイデース『戦史』(上)、久保正彰訳、卷二、四五。

